【特別調査報告】西厳寺蔵『小川貫弌資料』調査報告（七）

藤井由紀子
小川徳水

〔調査報告掲載にあたって〕

本報告は、二〇一八年より継続してきた、科学研究費・基盤研究C「日中戦争下の学術調査と人的交流を探るプロジェクト―興亜留学生小川貫弌の記録より」の年度報告である。[1] 戦時下に作成された中国仏教史に関する調査記録を、歴史資料としてどう位置付けるのか。当研究プロジェクトでは、昭和十四年（一九三九）、日中戦争下、浄土真宗本願寺派（以下、本願寺派、もしくは、西本願寺と略す）の興亜留学生として渡中した小川貫弌（以下、貫弌と略す）が、中国にて作成・蒐集した資料を調査対象とし、中国での実地調査を通してこれを検証してきた。ところが、二〇二〇年一月から始まった新型コロナウイルスの流行、および、それ以降の中国で徹底された「ゼロコロナ政策」の影響による調査環境の変化をうけて、昨年度から当初の目的を変更し、画像データベースの構築と並行して、付随的な活動として位置づけていた、国内における比較資料のデータ蒐集に本格的に取り組み始めた。以下、本稿では、その後の研究状況の概要について報告したい。

歴史学にとって、考察の基礎となる史資料データの蒐集はつねに課題となるところであるが、古代や中世に比べれば多く残存している近代のそれも、新出・既出を問わず、比較資料となりうるものとなると、その探索はなかなかに容易ではない。まして、本研究プロジェクトは調査対象が日中戦争に関わる。国立公文書館アジア歴史資料センターをはじめ、戦争関係文書のデジタルアーカイブ化も着実に進んではいるが、個人蔵のものとなると、個人情報の開示にとどまらず、戦争協力という事実と直面せざるをえないため、調査の交渉がうまくいかなかった例は、実はこれまでにも存在している。加えて、実際に公開するかどうかは別としても、「小川貫弌資料」の比較研究という性格上、公開を前提として調査協力を依頼する形をとることになる。所蔵者との協力関係を築いていくためには、それまでの研究成果とともに、調査の趣旨や意義を明示し、事前に十分な理解を得ておくといった作業が必要で、調査着手以前、準備段階の交渉においても、想定以上の難しさがある、といわざるをえない。

さて、こうした試行錯誤の状況下にあって、本年度、少しずつ取り組んできたのが、中国で貫弌と直接交流のあった人物に関する資料調査である。[2] というのも、本願寺派の興亜留学生として日中戦争下の中国に渡った貫弌が、中国で交流した人々の大半は同派に所属した僧侶であり、中国での開教事業に何らかの形で携わっていたというのみならず、概して重要な地位にあった人物が多く、その自坊も今日まで継承され、そこに関係資料が残されている可能性も高い、と考えられるからである。また、同じ宗派に属し、かつて中国で同様の立場に身を置いた人々の親族であれば、調査・研究の趣旨や真意について理解を得やすい、ということもある。事実、本報告で〔史料紹介〕として掲載した「小笠原彰眞資料」は、現在、龍谷大学大宮図書館に寄贈されているが、もとは

小笠原彰眞（西本願寺上海別院輪番・中南支布教総監及び開教総長）の自坊に残されていた資料群で、小笠原の親族への聞取りの結果、同図書館に寄贈されたということが判明し、今回の調査に至ったという経緯がある。さらに、同じく本願寺派については、西本願寺の関係機関に保管された開教関係資料の存在も視野に含めている。ただし、同寺ではこれらの資料を広く学術利用に資することは想定しておらず、「小川貫弌資料」の比較資料として利用するためには、今後、いくつかの手続きを踏まえていく必要がある。

次に、昨年度から着手しはじめた画像データベースの構築については、三月に試行版として公開した山西省関係の資料にひきつづき、現在、南京関係の写真資料を公開するべく整理作業中である。これら南京関係の資料は、科研プロジェクトとして着手した初年度、貫弌が講師をつとめた南京仏学院を中心に、「古林律寺と南京仏学院―西厳寺蔵「小川貫弌資料」南京関係資料をめぐって」として一応の分析を試みているが[3]、画像データベースではこの南京仏学院を主軸として、その後の調査の成果等を加えて構成する予定である。

さらに、南京関係資料の画像データベースの構築作業と並行して、二〇二二年十二月五日から十四日にかけて、同朋大学ＤＯプラザ閲蔵１Ｆギャラリーにおいて、「戦時下の中国仏教研究Ⅲ―南京仏学院と「亀谷法城資料」」展を開催した。ここに取り上げた南京仏学院は、昭和十四年（一九三九）に創設された中国人僧侶養成学校で、陸軍特務部の管轄のもと、中国の青少年を選抜し、日本の開教事業に資する人材を育成することを目的とした。仏教と青少年教育を通して中国の人々を懐柔する宣撫工作機関として開設されたわけであるが、その一方で、若き僧侶候補生たちに十分な生活環境と教育プログラムが提供されたことも、また事実である。むろん、日本式を強要した形ではあったが、当時の中国では僧侶の社会的地位は低く、経済的にも窮乏する状況であったなか、南京仏学院は教育施設として一定の役割を果たした、とみることもできる。そうした戦争下における人的交流の複雑、かつ、特殊な状況を、歴史的にどう評価するのか。本展覧会では、写真資料を中心に、同学院での日本人講師と中国人学生との関係を具体的に提示し、一般の方々や学生たちに戦争について改めて考えてもらえるよう、展示内容の工夫を試みた。

なお、戦中・戦後のアルバムが三冊、南京仏学院の機関誌として発行された『南京仏学院だより』の第七号、「開教使」と刷られた名刺が一枚と、わずか数点ではあるが、南京仏学院で貫弌とともに開学当初から講師をつとめた亀谷法城（本願寺派開教使）の自坊明楽寺（山口県熊毛郡田布施町）に残されていた「亀谷法城資料[4]」を、「小川貫弌資料」の比較資料として、本展覧会では特にクローズアップした。この「亀谷法城資料」については、初年度、南京仏学院について考察した際、一度、その内容を吟味しているが、今回は画像データベース構築作業との連携から、特に写真資料を中心に精査し、そこから歴史情報を読み取り、

「小川貫弌資料」との比較検証を試みた。ちなみに、かつて明楽寺には、『南京仏学院概況報告』（昭和十四年十二月発行）・『南京仏学院一覧』（昭和十七年六月発行）という、仏学院の設立経緯や組織構成について記された公的記録も残されていたが、現在は散逸して所在不明となっている。[5] したがって、公的記録が現状含まれていないという意味では、「亀谷法城資料」は資料としての内容に乏しいといわざるをえない。しかし、南京駐留時代のアルバムには二三〇枚にものぼる写真が貼付されており、戦争下における人的交流の探索という、当プロジェクトのコンセプトからすると、写真の画像から得られる情報は少なくなく、その史料的価値は決して低くない、と考える。[6] そして、同様に、「小川貫弌資料」にも南京関係の写真一五〇枚が含まれており、「亀谷法城資料」を補完的に用いつつ、日中戦争下における複雑な人的交流の諸相を明らかにしてくれる資料群として位置づけたうえで、これらを画像データベースを通して公開していく予定である。

最後に、龍谷大学世界仏教文化研究センター（RCWBC）において、本年度より「西域総合研究班（代表：三谷真澄）」の第5研究グループとして「小川貫弌師旧蔵資料の調査研究（代表：佐藤智水）」が発足したことを付言しておきたい。このRCWBCにおける研究グループ発足は、貫弌が所蔵していた「橘瑞超文書」を契機として始まったもので、大谷探検隊のメンバーとして調査に加わった橘瑞超（以下、瑞超と略す）が個人的に蒐集したという西域文書断簡のうち、瑞超から親交の証しとして貫弌に贈られた数十点を調査対象としている。[7] これらはほとんどが小さな紙片であるが、中国国家図書館（NLC）が、フランス国立図書館（BnF）所蔵の「敦煌文書」約五三〇〇点を「中华古籍资源库」で公開したというニュースは記憶に新しい。料紙や墨など、古文書科学ともいうべき科学的な視座からの研究が進んだ昨今、龍谷大学所蔵の大谷家旧蔵「敦煌文書」との校勘も併せて、これら断簡のデータ分析が進めば、国際的な研究蓄積に新たな知見を加えることも十分に期待できる。なお、戦争下の資料を分析対象とする本プロジェクトは、「敦煌文書」研究とは学術的関心が少し離れたところにあるが、貫弌所蔵の資料全般を広く把握しておくという視座から、本プロジェクトも第5研究グループのサブグループの一つとして連携を図ることになった。そして、今回の「小笠原彰眞資料」の調査も、何よりそうした連携関係の所産として実現をみたものである。文末ではあるが、ここにその経緯を明記して、今回の調査にお骨折りくださった諸先生方に対する心からの感謝に換えたいと思う。

（文責藤井）

参考URL

「日中戦争下の学術調査と人的交流を探るプロジェクト
—興亜留学生小川貫弌の記録—」
https://sites.google.com/view/doho-bukken-ogawadocuments

（1）科学研究費・基盤研究C「日中戦争下の学術調査と人的交流を探るプロジェクト―興亜留学生小川貫弌の記録より」（課題番号18K00917二〇一八～二〇二二年度　研究代表者藤井由紀子）。過去の報告については以下の通り。藤井由紀子・中川剛・高木祐紀・小川徳水・工藤克洋「特別調査報告　西厳寺蔵「小川貫弌資料」調査報告（一）」（『同朋大学仏教文化研究所紀要』第三十六号、平成二十九年三月）。藤井由紀子・小川徳水・北村一仁・大艸啓・工藤克洋・高木祐紀・中川剛・新野和暢・花栄・日比野洋文「特別調査報告　西厳寺蔵「小川貫弌資料」調査報告（二）」（『同朋大学仏教文化研究所紀要』第三十七号、平成二十九年十二月）。藤井由紀子・小川徳水・中川剛・日比野洋文「特別調査報告　西厳寺蔵「小川貫弌資料」調査報告（三）」（『同朋大学仏教文化研究所紀要』第三十八号、平成三十一年三月）。藤井由紀子・花栄「特別調査報告　西厳寺蔵「小川貫弌資料」調査報告（四）」（『同朋大学仏教文化研究所紀要』第三十九号、令和二年三月）。藤井由紀子「特別調査報告　西厳寺蔵「小川貫弌資料」調査報告（五）」（『同朋大学仏教文化研究所紀要』第四十号、令和三年三月）。藤井由紀子・川口淳・中川剛・日比野洋文「特別調査報告　西厳寺蔵「小川貫弌資料」調査報告（六）」（『同朋大学仏教文化研究所紀要』第四十一号、令和四年三月）。さらに、資料分析に基づいて、『戦時下の中国仏教研究―西厳寺蔵「小川貫弌資料」と山西省調査記録』（同朋大学仏教文化研究所、平成二十八年十二月）、『戦時下の中国仏教研究Ⅱ―石壁山玄中寺復興と「小笠原宣秀資料」』（同朋大学仏教文化研究所、平成三十年七月）、『戦時下の中国仏教研究Ⅲ―南京仏学院と「亀谷法城資料」』（同朋大学仏教文化研究所、令和四年十二月）という三つの展覧会を開催している。

（2）調査交渉や調査先の選定については、小川貫弌の子息であり、西厳寺の現住職である小川徳水氏の協力が極めて大きい。

（3）注1のうち、「小川貫弌資料」調査報告（三）」を参照のこと。

（4）新潟大学（当時）柴田幹夫氏、龍谷大学野世英水氏により、明楽寺の法城の住居スペースであった離れから発見された資料である。「小川貫弌資料」の比較資料として、今後これを画像データベースにどう盛り込むか、関係者と相談のうえ、公開の道を探りたい、と考えている。なお、同資料は発見者の判断により、現在は貫弌の自坊であった西厳寺に寄託されている。

（5）両資料は、本願寺派開教使の日本語教育を論ずるための資料として、明楽寺を訪れ、亀谷と直接会って資料を調査した龍谷大学教授小島勝氏の手によって、その内容は辛くも記録として残ることになった（小島勝「本願寺派開教使の日本語教育」（小島勝・木場明志編『アジアの開教と教育』龍谷大学仏教文化研究叢書Ⅲ、法蔵館、平成四年三月）。

（6）『中外日報』の記事などから、日中戦争期、仏教を利用した宣撫工作の一環として、中国人僧侶の養成機関が中国各地に設立されていたことが知られるが、その具体的な内容については資料がなく、ほとんど明らかになっていない。

（7）『劫余帖』と題した冊子に貫弌自身の手によって貼付された状態で保管されており、同帖に同じく貼付された橘瑞超からの貫弌宛書簡には、「陳者　先年お話し申しました　西域出土品　別送いたしました。御親交賜りし記念にご恵存を」とある（猪飼祥夫「小川貫弌先生の残された貴重書概観」、『東洋史苑』第七〇・七十一合併号、平成二十年三月）。

《史料紹介》

龍谷大学大宮図書館蔵「小笠原彰眞資料」

藤井由紀子
小川徳水

〈はじめに〉

ここに紹介する資料は、西本願寺上海別院の輪番であり、浄土真宗本願寺派（以下、本願寺派と略す）の中南支布教総監・開教総長であった、小笠原彰眞（以下、小笠原と略す）の自坊西覚寺[1]に残されていた資料である。平成五年（一九九三）六月、その娘婿である小笠原慶麿氏によって龍谷大学大宮図書館に寄贈されたもので、現在、同図書館ではこれを貴重書として収蔵、管理している。本研究プロジェクトでは、過去五年間にわたり、中国仏教史学者であった小川貫弌（以下、貫弌と略す）が、本願寺派の興亜留学生として日中戦争下の中国に渡った際の記録を、「小川貫弌資料」（岐阜県各務原市西厳寺蔵）として研究対象とし、副次的な活動として関連資料の渉猟に努めてきたが[2]、新型コロナウイルス流行による海外調査の環境変化を鑑みて、昨年度からは範囲を拡大し、日本国内における関連資料の本格的な探索を進めており、本稿で紹介する小笠原の資料もまた、そうした試みの一つとして調査を実施したものである。

冒頭でも述べたように、小笠原は日中戦争時、本願寺派の中南支における開教事業を統轄する立場にあり、渡中直後の貫弌に対して南京駐留を命じた人物でもある[3]。残念ながら、今回調査した資料中には貫弌に直接関わるものは含まれていなかったが、広義の補完資料という視座から、この西覚寺旧蔵資料を「小笠原彰眞資料」と仮称し、その内容や「小川貫弌資料」との関連について、以下、簡略に紹介していくことにしたい。

〈一　小笠原彰眞と小川貫弌〉

昭和十四年（一九三九）四月、本願寺派の興亜留学生[4]の一人として渡中した貫弌は、航路、まず上海に入り、ここで小笠原と面会した。本願寺派の上海における開教拠点は、明治三十九年（一九〇六）、上海市街の乍浦路に開設された出張所に始まるが、昭和六年（一九三一）五月、本堂や附属施設を新たに竣工したことを機に、これが昇格して上海別院となり、輪番事務取扱に任じられたのが小笠原であった[5]。その後、昭和十二年（一九三七）七月、盧溝橋事件が勃発して日中戦争に突入すると、上海別院には小笠原を主任として臨時部が特設され、従軍布教をはじめ、遺骨送迎などの活動を担ったが、さらに戦局を反映し、昭和十四年（一九三九）一月、別院内には中南支布教総督部が設置され、その総監の任に就いたのが、やはり小笠原であった。そして、この布教総督部設置の三ヶ月後に貫弌は渡中したのであり、上海で小笠原と面会し、南京に向かうよう指示を受け、南京出張所の駐在となったほか[6]、同派が運営する中国人青年僧侶養成所である南京仏学院で、二年間にわたって教務主任兼講師をつとめたのである[7]。

なお、この南京仏学院というのは、昭和十四年（一九三九）二月、中支の宗教工作推進のため、陸軍特務部が日本宗教各派を横断的に結ぶ形で「中支宗教大同連盟」（以下、大同連盟と略す）を発足させた、その下部組織にあたる。すなわち、同年四月、大同連盟仏教部は中国仏教者との提携を目的として日華仏教会を各地につくったが、南京では市長蔡培を総裁として「南京日華仏教連盟」が設立され、七月にその教育機関として誕生したのが南京仏学院であり、その運営はもっぱら本願寺派に委ねられていた。なお、この大同連盟において本願寺派は重要な位置を占めたらしく、名誉職ながら副総裁には大谷光瑞（以下、光瑞と略す）が就いたほか、総務局長には光瑞の腹心でもあった小笠原が就任した[8]。また、小笠原は大同連盟発足以前、昭和十三年（一九三八）十月に上海で開かれた結成準備委員会でも委員長をつとめ、つづいて開催された文部省宗教局協議会にも連盟側を代表してこれに参加していた。そして、そうした小笠原の立場を投影して、大同連盟の年鑑には小笠原による連盟結成記が掲載されている[9]。

ところが、小笠原とも面識があり、中支の宗教工作の要ともいうべき南京仏学院に職を得ながら、貫弌の残した資料には仏学院に関するものは散見されるが、大同連盟にまつわるものはなぜか含まれていない。唯一、南京日華仏教連盟の結成時の式次第が数枚あるのみで[10]、上海別院に関するものも皆無といった状況にある。そこで、今回、小笠原の親族から、龍谷大学に西覚寺の旧蔵資料が寄贈されているとの情報を得たことを契機として、貫弌資料の空白を補完する目的で、その調査を試みることとしたのである。

〈二　大宮図書館蔵「小笠原彰眞資料」〉

冒頭でも述べたように、「小笠原彰眞資料」は、現在、龍谷大学大宮図書館に貴重書扱いで所蔵されている。また、資料とともに、寄贈時の目録も保管されており、「一、大谷光瑞氏関係資料十二点　一、真宗史関係文書」と、それには記されている。さらに、いつの時点のものかは不詳ながら、資料には十一の分類番号が付されている。番号に付随した事項名にしたがってこれを紹介すると、「①上海別院本堂礎石（光瑞筆）」、「②光瑞猊下寄せ書き」、「③小笠原彰眞宛褒美賞状」、「④大谷光瑞著『支那古陶瓷』」、「⑤アルバム大谷光瑞関係資料（上海別院関係資料）」、「⑥古陶瓷類」、「⑦上海別院調査書（民国35年12月）」、「⑧光瑞上人御原稿」、「⑨小笠原彰眞各種辞令書」、「⑩宇野本空各種辞令書」、「⑪その他資料」とあり、寄贈目録にいう光瑞関係資料十二点が具体的にどれを指すかなど、目録との明確な対応関係は不明である。

表1は、この分類に沿って資料の内容を一覧としてまとめたものである。光瑞関係の資料が大半であるが、戦後のものも少なからず含まれている。なお、⑦と⑪、および⑨に含まれた褒状一通は、戦後の資料ではあるが、昭和二十年（一九四五）八月の終戦以降、中国政府が賠償として中国内の日本資産を接収した際のもので、日中戦争に関わる資料であることが特に留意された。

【写真１～３】　西覚寺（徳島県吉野川市鴨島町牛島）

吉野川流域、美馬から剣山へと連なる山々を背に立つ西覚寺は、阿波地方への浄土真宗移入に重要な役割を果たしたと伝えられる歴史的寺院である

【表１】　龍谷大学大宮図書館蔵「小笠原彰眞資料」一覧　　西覚寺旧蔵（徳島県吉野川市）

現状における分類 （分類番号に付せられた事項名を原文のまま掲載）	資料内容
①上海別院本堂礎石（光瑞筆）	掛軸1点（上海別院礎石銘文の原書） 落款「本派本願寺上海／別院本堂礎石／昭和十八年八月／光瑞〔印〕〔印〕」
②光瑞猊下寄書き	印刷物2種4点 「大正14年10月24日／京都都ホテル」2点 「大正15年2月2日／三夜荘」2点（光瑞渡欧の送別会でのもの）
③小笠原彰眞宛褒美賞状	2点 昭和29年10月4日付「褒状」（大谷光瑞随伴の功労に対するもの） 昭和52年6月27日付「褒状」（宗派発展の功労に対するもの）
④大谷光瑞著『支那古陶瓷』	刊本1点　【写真8】 陶雅会、昭和7年4月10日発行
⑤アルバム大谷光瑞関係資料 （上海別院関係資料）	アルバム1点（台紙10紙・写真52枚）【写真7】 上海別院写真のほか、大谷光瑞のアジア各所で様子を撮影したもの
⑥古陶瓷類	3箱約60点 紺箱1箱（標本箱仕様、陶片6点、「大峪店孔汝器青」「大峪店孔」と墨書あり）【写真5】 紙箱1箱（陶片23点、付箋紙に「宋代官窯」「汝の官」とあり） 段ボール箱（包5つで陶片約30点、包2つは龍谷大学紙袋で「郊壇窯」のメモ書あり）
⑦上海別院調査書 （民国35年12月［ママ］）	1点（上海別院接収時の財産等目録で複数資料を綴じたもの）中華民国35年1月付　【写真6】 日商産業報国表 第二次財産調査書目録 土地接収説明書 土地明細表 土地明細表 土地登記表 中華海員党部及仝海員工会押収七拾弐点什器 今収到 土地明細表 建物明細表 建物明細表 自登第一一九号／不動産登記表 別紙什器説明書 日僑現有財物明細表　（10紙） 有価証券明細書 銀行預金明細表 重要職員名簿　西本願寺上海別院 華中・華南出張所概況（2紙） 日僑現有財物明細表　（1紙） 日僑現有財物明細表　（5紙） 日僑現有財物明細表　（6紙） 御願 呈為呈請准予完竣按収事務由 今収到 不動産登記表 日冊六九八号　小笠原彰真（2紙） 上海西本願寺所有地図
⑧光瑞上人御原稿	大谷光瑞自筆原稿3種（下藤紋入原稿用紙の自筆原稿＋封筒1） 支那鉄道建設計画（9枚） 上海昭南大幹線（2枚） 上海ビルマ印度大幹線
⑨小笠原彰眞各種辞令書	53点（昭和21年3月～昭和53年6月） ※最古のものは中華民国35年/昭和21年3月付「奨状」1通　【写真4】 （上海和平博物館の古物整理の功績に対する褒状）
⑩宇野本空各種辞令書	96点（大正4年4月～昭和16年6月） ※小笠原娘婿の慶麿氏の実父が宇野本空 本空の自坊は奈良県吉野郡下市町の瀧上寺
⑪その他資料	上海福寿院関係書類2点 決算書（袋とじ10紙）1点／昭和20年4月1日～ 9月30日 領収書1点（「中華福寿院長　中津彰教殿」 ※福寿院は上海別院が運営した中国人の救護施設

以上が、「小笠原彰眞資料」の大略である。南京仏学院や貫式に関するものは含まれておらず、かつ、断片的でもあるため、資料全体としてその史料性を問うことは、正直難しいといわざるをえない。ただし、戦時下の学術研究をテーマとする本プロジェクトの立場からすると、上海和平博物館に関する褒状、および、中国古陶磁の陶片の数々は、中支における文化工作の一端を示すという意味で、非常に興味深いものだと判断された。戦争下、抗日感情を抑え、中国の人々を懐柔するべく、軍部が中心になって進められた宣撫工作においては、生活保護・医療救護といった社会事業だけでなく、文化工作という形で、史跡・古物の学術調査や博物館建設などの文化支援が盛んに行われていたからである。そこで、次章では「小川貫弌資料」との比較という観点から、上記二種の資料について少し考察をめぐらせてみたい。

〈三　小笠原彰眞と郊壇窯
―中支における文化工作との関連をめぐって〉

まず、「小笠原彰眞資料」のうち、改めて紹介したいのが、⑨の辞令類に分類されていた、中華民国三十五年（一九四六）三月付の「陸軍第三方面軍上海日僑管理処奨状」（写真4）である。ここには、

陸軍第三方面軍上海日僑管理処奨状　第六号

査日僑小笠原彰真策進日僑呈献古物暨協助上海和平博物館整理工作備極勤労特予奨励此状

中華民国三十五年三月〔印〕

兼所長王光漢[11]

とあり、戦後まもなく、国民政府陸軍第三方面軍上海日僑管理所が、小笠原の上海和平博物館における古物整理の功績に対して授与した褒状だとわかる。

終戦後、中国政府は中国内に保有された日本の資産を接収したが、上海別院も例にもれず、昭和二十年（一九四五）十月に接収され、供出された古物と図書は別院を改造した上海和平博物館・和平図書館で展覧に供された。おそらく小笠原は、輪番として別院と別院関係者の財産を中国政府に譲渡する作業とともに、古物についてもとりまとめ、両館で展覧する準備を手伝ったのであろう。なお、この和平博物館・和平図書館については、中国の新聞『大公報』の記事に基づき、別院接収時の様子を紹介した陳祖恩氏の論考に詳しい。すなわち、同年十二月の上海日僑管理所の統計では、上海には博物館が二十九箇所、図書館が五十三箇所あり、収蔵された古物・古画類は千五百六十八点、書籍類は五千六百四十六冊であったが、これらは上海別院に集められ、整理・登録・鑑定を経たのち、貴重なものは和平博物館・和平図書館で一般に公開されたのだという。なお、この供出作業は第三方面軍の出資で行われ、二十五万元で別院を博物館と図書館に改築したらしい[12]。ちなみに、⑦に分類された別院接収資料には「日僑現有財物明細表」という形で図

書目録が付されており、その全てではないにせよ、供出された図書の一部を知ることができる。

一方、供出された古物については詳細は不明であるが、接収された書画類は平凡で貴重なものがないと『大公報』に報じられていること[13]、および、中支という地域の歴史的な土地柄から推すと、中国古陶磁を中心としたものではなかったか、と考えられる。そこで、注目されるのが、「小笠原彰眞資料」中の陶片類である（写真5）。全部で六十点ほどの陶片とともに、「大峪店孔」や「郊壇窯」「八卦田」と記された墨書やメモ書きが目を引く。というのも、実のところ小笠原は、南宋時代の官窯のうち、謎の官窯とされていた郊壇窯を、昭和五年（一九三〇）、杭州郊外の八卦田の地で発見した人物として、中国陶磁史上にその名をとどめているからである。ただし、小笠原自身の回顧によると、郊壇窯の発見はひとえに光瑞による学問的研究の成果であり、光瑞の古陶磁趣味に性来の探求癖が加わって、中国陶磁史に大きく貢献する数々の成果を成し遂げていった、そのうちの一例が郊壇窯である、と述べている[14]。

確かに、『支那古陶瓷』を見ても、光瑞は南宋の官窯について力説を展開しており、浙江省など、中国の中支地域において、小笠原らとともに古陶磁の調査を精力的に行っていたのだろう。「小笠原彰眞資料」中の陶片類も、おそらくはそうした調査時の発掘品だとみてよい。しかしながら、戦後における小笠原の言そのままに、光瑞や小笠原の調査がもっぱら骨董趣味的なものとして片付けられるかどうかについては少し疑問がある。なぜなら、「小川貫弌資料」には、北支の中心であり、古くから仏教文化が盛んであった山西省において、軍部の主導のもと、文化工作の一環として、日本の仏教史学者たちが太原の博物館（山西省立新民教育館、現在の山西省民俗博物館）[15]を拠点に調査活動を行っていた、そうしたことが具体的に跡づけられる資料が含まれているからである[16]。また、昭和十七年（一九四二）八月、資源科学諸学会連盟が組織した山西学術調査研究団に参加した考古学者の和島誠一も、山西省が中国古代文明の発祥地であることから、軍の保護のもとで先史時代遺跡の調査を行い、石器・土器・銅器などを発掘したが、十二月までの百日間のうち、五十日を現地調査に費やし、残りは太原の博物館で収蔵遺物の整理陳列を行った、と書き記している[17]。

ちなみに、昭和十二年（一九三七）十一月の太原占領以降、博物館において文化財を管理したのは日本陸軍第百九師団内に設置された山西文化保護会である。戦禍によって破壊された市街地の復興とともに、学者たちの調査活動を管轄して貴重な歴史遺物を文化財として博物館に集め、保護する活動を行っていた、とみられる[18]。ただし、昭和十五年（一九四〇）十二月には、太原博物館は山西省公署教育庁に返還されており、名称も山西省立新民教育館と変更され、親日派政権の管理下に移っているが、軍の特務機関との連携は相変わらず保たれていたらしく、事実、貫弌や和島は軍の保護下で調査活動を行っている。なお、このように、博物館を通した文化財保護に大きく軍部が関与したことは、

一見すると、不思議なことのように見えるかもしれないが、十九世紀にヨーロッパで確立された博物館という制度は、国家というものを視覚的に示すという点で、すぐれて近代的なシステムの一つであり、明治時代に日本にもそれが導入され、近代国家化の過程に大きな役割を果たしてきたのである。[19]そして、その後、日本の植民地支配においても、博物館は非常に有効な文化工作の手段として用いられていくことになったのだ、と思われる。

さらに、満州でのことになるが、光瑞とも関連する事柄として旅順博物館の例も挙げられる。すなわち、滋賀大学経済経営研究所蔵「旅順博物館陳列品図録」の冒頭、「序言」には、

旅順博物館ハモト関東軍都督府満蒙物産館ト称シ大正六年四月、其創設ヲ見タルモノニシテ翌七年十一月、本館ノ成ルニ及ビ博物館ト改称シ次デ同八年四月、都督府ノ改制ト共ニ関東庁ノ名称ヲ冠シ爾来十有余年ヲ経シガ昭和九年十二月、関東州庁ノ分立ニ伴ヒ茲ニ所在地名ヲ冠シ旅順博物館ト称名スルニ至レルモノナリ。〜(中略)〜

本館ハ満洲蒙古及支那本土ニ於ケル考古及風俗参考品ヲ主体トシ其ノ標本総数三万余点ヲ蒐蔵スルモノナルモ輓近東亜ニ於ケル考古学ノ趨勢ハ本館ヲシテ益々考古学的博物館トシテ其態容ヲ定メントスルノ機ニアリ。

とあって、大正六年(一九一七)に創設された関東都督府の満蒙物産館が、翌年には博物館に格上げされ、さらに昭和七年(一九三二)の満州事変を経て、旅順博物館となった、という経緯がわかる。そして、日中戦争勃発と関連するのだろう、昭和十二年(一九三七)に旅順博物館は収蔵展示を大幅に拡張しており、

本館蔵品ノ増加ニ関シテ特ニ記スベキハ考古部ニ於イテ篤志ノ士ノ厚意ニ俟ツ所多ク就中、大谷光瑞師ノ中央亜細亜及印度ニ於イテ蒐集セラレタル遺品竝ニ南満州鉄道会社ヨリ満州及蒙古発見ノ多数品目ノ交付ヲ受ケタルコトナリ。

と、そこに光瑞の蒐集品も寄贈されたのである。[20]

とすれば、中支地域でも同様のことが試みられていた可能性は高く、上海に三十館近くあったという博物館は、おそらくそうした動向を間接的に物語っているのではないか、と推察できる。なお、小笠原の郊壇窯発見は昭和五年(一九三〇)二月二十四日のことであるが、[21]日中戦争勃発以降、このような従前の発掘品を含め、日本人の手によって中国古陶磁の優品が蒐集され、文化工作の一環として博物館に収蔵され、展示に供されていたのだろう。『大公報』によると、第三方面軍総司令の湯恩伯は、接収にあたって上海別院を視察した際、「両館の設立は記念の意義が極めて大きく、内部の配置はできるだけ完全にするよう」指示を出したという。[22]俄かづくりとはいえ、和平博物館の開設に臨んで「記念の意義が大きい」と湯総司令に言わしめたことは、逆にいえば、日本統治下において、博物館というものが日本の占領政策上、非常に有効な政治

的手段として機能しており、戦後、中国政府はそれを換骨奪胎し、その政策に利用しようとしたことを意味しているように思う。

では、和平博物館・和平図書館で展覧に供された古物や書籍は、その後、どうなったのであろうか。上海で内山書店を経営していた内山完造によると、南京故宮博物館と国立大学図書館に分贈されたものの、その処分の内容が公表されたことはないのだという。[23] だとするならば、今後、「小川貫弌資料」によって跡づけられるような学術調査と宣撫工作との関係を、「小笠原彰真資料」中の古陶磁類を通して考察するためには、和平博物館から南京博物院への陶磁器の移動を具体的に明らかにしていくとともに、上海別院の関係資料をさらに渉猟していく必要があるだろう。[24] 新型コロナウイルスの影響もあり、現今においてその検証は簡単ではないが、それらを以後の課題として、本稿を締めくくりたい。

〔謝辞〕

龍谷大学世界仏教文化研究センター「西域総合研究班」代表の三谷真澄氏、および、同「小川貫弌師旧蔵資料の調査研究」グループ代表の佐藤智水氏、大宮図書館大木彰氏には、「小笠原彰眞資料」を調査するにあたってさまざまご尽力を賜りました。また、アジア近代仏教史を専門とする台湾高雄大学・仏光大学柴田幹夫氏、龍谷大学野世英水氏、元・広島大学敦煌学プロジェクト研究センター白須淨眞氏にも、同資料についてご教示を賜りました。謹んで心よりお礼を申し上げます。

【写真４～８】　龍谷大学大宮図書館蔵「小笠原彰眞資料」より

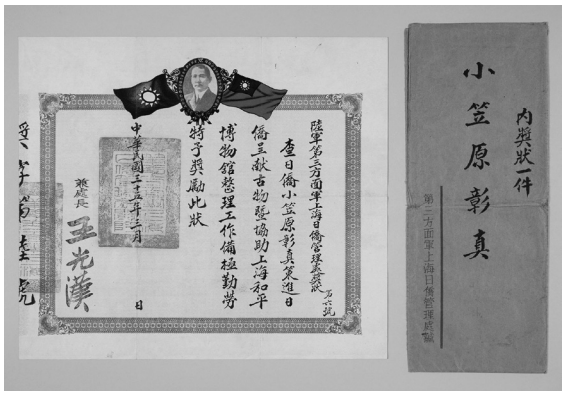

写真４「陸軍第三方面軍上海日僑管理処奨状」（付・封筒）

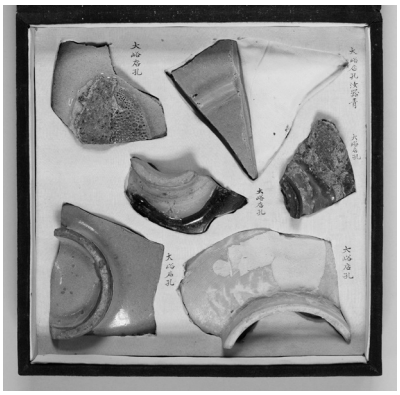

写真５「古陶磁類」
標本箱に収納された６片の古陶磁片
「大峪店孔汝器青」「大峪店孔」の墨書あり

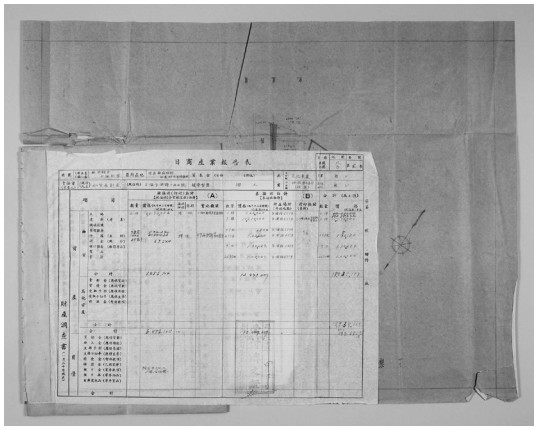

写真６　「上海別院調査書」

写真７　「アルバム」より上海別院古写真

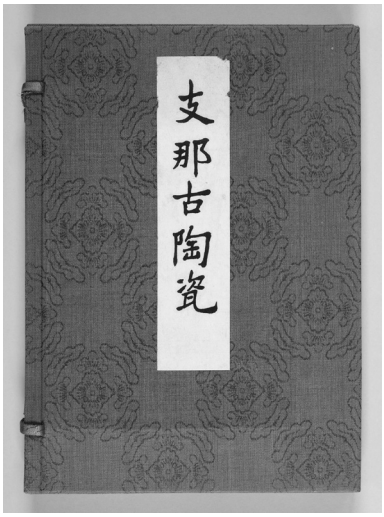

写真８　「支那古陶瓷」（大谷光瑞著）

（1）徳島県吉野川市鴨島町牛島所在。『鴨島町誌』や『徳島県史』によると、西覚寺は阿波地方に浄土真宗を移入した小笠原貫道が、寛喜二年（一二三〇）、牛島に建立した森ノ坊に始まるという（鴨島町教育委員会編『鴨島町誌』、鴨島町教育委員会、昭和三十九年三月。徳島県史編さん委員会編『徳島県史』第二巻、昭和四十一年三月）。これを史実と見ることには問題があるが、西覚寺は当該地方の浄土真宗移入に関して一定の歴史的役割を果たした寺院である、と解することはできる。

（2）科学研究費・基盤研究Ｃ「日中戦争下の学術調査と人的交流を探るプロジェクト―興亜留学生小川貫弌の記録より」課題番号 18K00917 二〇一八～二〇二〇年度　研究代表者藤井由紀子）。

（3）後年に回顧した貫弌の手記には、「昭和十四年四月上海に上陸し上海別院の小笠原彰眞開教総長のもとで南京派遣が命ぜられ、南京の太平路白菜園の西本願寺出張所横湯通之主任のもとで厄介になり鳳山古林律寺に入り中国僧と共に南京仏学院の起立生活をすること、なった」とある（小川貫弌「仏教史学を志して」、西厳寺蔵「小川貫弌資料」、昭和五十一年）。

（4）興亜留学生とは、西本願寺が日中戦争下の中国に派遣した留学生のことを指す。北京へは三上諦聴、新野修基、中支へは貫弌と海野昇雄の計四名の派遣が事前に決定されていたらしい（注3資料）。

(5) 浄土真宗本願寺派国際部・浄土真宗本願寺派アジア開教史編纂委員会編『浄土真宗本願寺派　アジア開教史』（本願寺出版社、平成二十年三月）。

(6) 海外開教要覧刊行委員会編『海外開教要覧　海外寺院開教使名簿』（海外開教要覧刊行委員会、昭和四十九年三月）。

(7) 南京仏学院の院長は南京出張所トップの横湯通之がつとめた。南京出張所は、昭和十三年（一九三八）に太平路白菜園に開設されたが、後に中山東路上乗巷に移転、昭和十七年（一九四二）に別院に昇格した。

(8) 大同連盟の総裁は近衛文麿、副総裁には後に第二次近衛内閣の参議をつとめた光瑞が推戴された。また、連盟の組織構成は神道部・仏教部・基督教部・総務局となっていた（松谷曄介「日中戦争期における中国占領地域に対する日本の宗教政策―中支宗教大同連盟をめぐる諸問題―」、『社会システム研究』第二十六号、平成二十五年三月。新野和暢『皇道仏教と大陸布教―十五年戦争期の宗教と国家―』、社会評論社、平成二十六年二月）。

(9) 小笠原彰眞「中支宗教大同連盟結成記」（福田闡正編「中支宗教大同連盟年鑑」、中支宗教大同連盟、昭和十五年十一月。大東仁・槻木瑞生編『日本仏教団（含基督教）の宣撫工作と大陸』第13巻所収、龍渓書舎、平成三十年十二月）。そのほか、小笠原彰眞「中支宗教大同連盟成る」（『教海一瀾』第八六二号、昭和十三年十二月）。

(10) 「日華仏教連盟結成総会並大会秩序表」（西厳寺蔵「小川貫弌資料」、昭和十四年四月頃）。

(11) 封筒表には「〔墨書〕内奨状一件／小笠原彰真」「〔印刷〕第三方面軍上海日僑管理処緘」、封筒裏には「〔印刷〕陸軍」とある。

(12) 陳祖恩（加藤斗規訳）「大谷光瑞と上海―上海西本願寺と上海日本人社会」（柴田幹夫編『大谷光瑞とアジア―知られざるアジア主義者の軌跡』、勉誠出版、平成二十二年八月）より下記を引用。「滬日僑献古物書籍」（『大公報』一九四五年十二月二十二日号）、「和平図博物館、三週以後開幕」（『大公報』一九四六年二月二十四日号）。

(13) 注12を参照のこと。

(14) 小笠原彰眞「趣味と光瑞　世界に誇る陶片」（『大乗　ブディストマガジン』第五巻第十号、昭和二十九年十月）。なお、小笠原は光瑞の趣味に影響を受けて陶磁器研究を始めたとあるが、西覚寺第二十四世にして、小笠原の実父である小笠原徳善は、中国古陶磁に造詣が深く、斯界の権威であったと伝えられ（鈴木善作編著『地方発達史とその人物』四国の巻、郷土研究社、昭和十七年九月）、小笠原にはもともと中国古陶磁になじむ素地があったと考えられる。

(15) 中華民国八年（一九一九）十月、太原文廟内に開設された山西省教育図書博物館を濫觴とし、山西公立図書館、山西省立民衆教育館と名称を変え、太原占領以降は日本軍の管理下に置かれた（山西省博物館編『山西省博物館八十年』、山西人民出版社、一九九九年）。

(16) 貫弌自身、太原崇善寺で十一点の経典類を発見しており、それらは同館に保管されることになった、と報じられている（『朝日新聞』北支版、昭和十六年（一九四一）九月二十七日号）。

(17) 和島誠一「山西省河東平野及び太原盆地北半部に於ける先史学的調査の概要」（『和島誠一主要著作集　日本考古学の発達と科学的精神』、和島誠一著作集刊行会、昭和四十八年十二月）。

(18) 「山西文化保護会設立趣意書」（『太原博物館案内』、山岡部隊内山西文化保護会、昭和十五年十一月）。

(19) 北沢憲昭『眼の神殿―「美術」受容史ノート』（美術出版社、平成元年九月）。

(20) 滋賀大学経済経営研究所蔵「旅順博物館陳列品図録」（旅順博物館、昭和十二年七月）。同資料については、滋賀大学経済経営研究所「収集資料＆デジタルアーカイブ検索システム」https://mokuroku.biwako.shiga-u.ac.jp/を利用。

(21) 一般に中国陶磁史において郊壇窯の発見は昭和五年二月二十五日とされるが、注14における小笠原の回顧にしたがって二月二十四日とした。

(22) 注12陳氏前掲論文。

(23) 内山完造「ズルイ奴だなあ」（内山嘉吉編『魯迅の思い出』、社会思想社、昭和五十四年九月）。

「小川貫弌資料」によると、山西省立民衆教育館には、貫弌が太原崇善寺や五台山で発見した古経典類も収蔵されたとみられるが、その後身である山西省文物局所管の山西省民俗博物館の蔵品には、それらは現在含まれていない。なお、一九四九年十月、中華人民共和国が誕生して以降、同博物館は山西省図書博物館となり、さらに一九五三年からは山西省博物館として運営されてきた。その場所は文廟内で変更はなかったが、二〇〇四年になって汾河の西岸に場所を変え、山西省博物院という形で新たな省立の博物館が開設されたことで、その所蔵品も多く移動をみたもの、と考えられる。このように、今後は中国の古物の移動史も視野に含めて調査を行いたい、と考えている。